

奈良の故郷を悲しびて作る歌一首 并せて
短歌

一〇四七番

やすみしし 我が大君の 高敷かす 大和の国は 皇祖の
神の御代より 敷きませる 国にしあれば 生れまさむ
御子の継ぎ継ぎ 天の下 知らしまさむと 八百万 千年
をかねて 定めけむ 奈良の都は かぎろひの 春にしな
れば 春日山 三笠の野辺に 桜花 木の暗隠り かほ
鳥は 間なくしば鳴く 露霜の 秋さり来れば 生駒山
飛火が岡に 萩の枝を しがらみ散らし さ雄鹿は 妻呼
びとよむ 山見れば 山も見が欲し 里見れば 里も住み
よしものふの 八十伴の緒の うちはへて 思へりしく
は 天地の 寄り合ひの極み 万代に 栄え行かむと 思
へりし 大宮すらを 頼めりし 奈良の都を 新た世の
事にしあれば 大君の 引きのまにまに 春花の うつろ
ひ変はり 群鳥の 朝立ち行けば さすたけの 大宮人の
踏み平し 通ひし道は 馬も行かず 人も行かねば 荒れ
にけるかも